

石井素介先生旧蔵の『参謀本部大陸第七課作成の兵要地誌図資料』 —解説と詳細目録—

解説：小林 茂

目録：多田隈健一・顧 立舒

石井素介先生が大阪大学文学研究科人文地理学教室にご寄贈下さった「参謀本部大陸第七課作成の兵要地誌図資料」は、外邦図研究資料としてだけでなく、第二次世界大戦末期における兵要地誌編集作業の一端を示すとともに、学徒動員に関する資料としても重要な意義をもつと考えられる。以下、こうした多様な方面からの本資料の活用を意識して、簡単な解説と詳細目録を示すことにする。

1945年当時、東京大学理学部地理学科の学生であった石井先生が、参謀本部で研究動員学徒として各種の作業に従事された経過については、すでに外邦図研究ニューズレター6号、7号に掲載の文章（石井2009; 2010）にくわしい。またこれらには、本資料の一部の作製過程に関する記述もあり（石井2009: 55-57）、他に得がたい資料となっている。本資料について関心をもたれる方は、まずこれらを参照されることをおすすめする。

関連して、本資料を考えるに際し関心をもたれるのは、第二次世界大戦末期に大学生が参謀本部で兵要地理の研究に従事した背景である。この時期に学徒動員として、多くの学生が各種の作業（勤労働員）に従事したことはよく知られているが、「研究動員学徒」とはどのようなものであったのだろうか。

この点に関心をもって『東京大学の学徒動員・学徒出陣』（東京大学史史料編集室1998）を参照したが、「研究動員学徒」に関する記述や資料を見つけることができなかった。ただし同書の「学徒動員先一覧」の1945年の項目には、理学部地理学科3年生の学生3名の動員があらわれ、動員先・実施機関とも不明であるが、石井先生の動員との関係がうかがわれる（東京大学史史料編集室1998: 94-95）。

つぎに石井先生の派遣された部署に着いてみておこう。参謀本部第二部は、情報関係の業務を担当する部で、1945年5月当時は第五課～第七課で構成されていた。第五課は「対ソ独などの欧州および印

度以西地域の情報」、第六課は「対英米、英帝国、南北米大陸、アフリカ、南方地域の情報」、第七課は「支那情報」をそれぞれ担当していた（秦編1991: 480-481, 497-500）。第七課に石井先生が配属されたのは、1944年10月から3ヵ月間、旧満洲で現地調査の経験があったからであろう。

ところで、「兵要地誌」とは、軍事的な目的で整備された地誌である。第二次世界大戦期に至るとさまざまな分野の情報が主に冊子の形で整備されており、そのなかには折り込みの地図が含まれているのがふつうであった（源2009）。詳細目録の「付図関係」の項には、兵要地誌の付属資料として作製されていたと考えられる場合に、簡単な記載を示している。

これに対し兵要地誌図は、地誌的情報を盛り込んだ一枚ものの地図で、1937年以降シベリアや満洲、蒙古、中国大陸について、10万分の1と50万分の1の図をベースマップとして作製されるようになった。ただし、第二次大戦期に戦線が広がると、それ以外にも多彩な縮尺のものが印刷された（小林2003）。詳細目録の縮尺の項をみると、基図の縮尺に左右されてか、さまざまな縮尺の図が見られる。

こうした兵要地誌の付図あるいは兵要地誌図の基図は、石井先生作成の目録にも示されているように外邦図が使用されている。当然のことながら統一的に整備されてきた10万分の1や50万分の1図を基図にしている場合が多いが、100万分の1航空図や30万分の1陸海編合図が使用されているのも注目される。このうち、広域的に交通路を表示するのに航空図が適しているのは理解しやすい。他方、30万分の1陸海編合図の使用は、それが1945年製版と新しいものであったという点からも、もう少し検討をくわえておきたい。

陸海編合図は、第二次世界大戦末期に、陸上に関する地形図と海域に関する海図を組み合わせで作られたもので、琉球列島や伊豆諸島、小笠原諸島、千

島列島では5万分の1の縮尺であるが、ミクロネシアでは10万部の1図もみられる(清水 2005; お茶の水女子大学文教育学部地理学教室 2007: 209)。北海道・本州・九州の海岸部をカバーする「陸海作戦要図」(やはり地形図と海図を組み合わせており縮尺は関東地方が10万分の1のほかは5万分の1)もあわせて、あきらかに連合軍の上陸作戦を意識して作製されたものである。本目録に記載されているものに、国立国会図書館に所蔵されているものを合わせてみると、中国大陸沿岸は30万分の1の縮尺で陸海編合図が整備されたことがわかる。おそらく長大な中国大陸の沿岸を5万分の1の縮尺でカバーすることは困難だったからであろう。

こうした点に留意して、石井先生作製の目録の1号「江北沿岸區空海基地概見圖」の説明をみると、海からの艦艇の侵入も考慮していることが明らかで、30万分の1陸海編合図を基図に、さらに他の情報を加えて兵要地誌図を作ろうとしていたことがうかがえる。この点は目録の2号についても同様であろう。

このようにみえてくると、本資料を構成する各種の地図や表は、第二次世界大戦末期という状況下で作製されていたことがうかがわれる。1,2号以外の資料についても、こうした状況をよく理解して検討をくわえる必要がある。

なお石井先生は、本資料を整理される際、資料14に含まれる資料の裏紙から、「昭和15年度と推定される日本陸軍の地図整備計画」(仮題)に掲げたタイプ印刷の文章を発見された。4丁(計8頁)のうち、AとBの間に2丁(4頁)の欠落があるが、当時の参謀本部で地図の整備についてどのように考えられていたかを示す貴重な資料である。中国大陸における日本軍占領地域外の要地の空中写真撮影、地図の積極的入手の勧め、中国側の測量に関するデータの確保に関する記述はとくに興味ぶかい。今後、類似の史料の探索も試みるべきであろう。石井先生のご配慮に感謝したい。

ところで石井先生は、本資料にみられる兵要地誌図作成作業には、地理学者はほとんど参与しておらず、その学術的レベルは余り高いものではなかったことを指摘されている(石井 2010: 30-31)。第二次世界大戦中のアメリカやイギリスで、戦場の地理情

報の整備に多数の地理学者が動員されていたのと比較すると、日本の地理学者のこの種の業務への関与は、非常に少ないことが確認できる。第二次世界大戦の末期になって、わずかながらにはじまったという程度である(渡辺正氏所蔵資料編集委員会編 2005; 小林 2011: 247-249)。今後は、こうした状況を明確に示すものとしても本資料を位置づけつつ、さらに検討をすすめる必要がある。

文献

- 石井素介 2009. 「終戦前後の参謀本部「研究動員学徒」時代の回想—「皇軍」における「兵要地理」のあり方と応用地理学の立場」外邦図研究ニューズレター6: 47-60.
- 石井素介 2010. 「戦時下「皇軍」の「兵要地誌」と地理学者の関与をめぐって」外邦図研究ニューズレター7: 29-32.
- お茶の水女子大学文教育学部地理学教室 2007. 『お茶の水女子大学所蔵外邦図目録』お茶の水女子大学文教育学部地理学教室.
- 小林茂 2003. 「兵要地誌図(大阪大学文学研究科人文地理学教室蔵)目録」外邦図研究ニューズレター1: 43-46.
- 小林茂 2011. 『外邦図—帝国日本のアジア地図』中公新書.
- 清水靖夫 2005. 「第二次世界大戦末期の内邦諸図について」外邦図研究ニューズレター3: 52-60.
- 東京大学史史料編集室 1998. 『東京大学の学徒動員・学徒出陣』東京大学出版会.
- 秦郁彦編 1992. 『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会.
- 源昌久 2009. 「日本の兵要地誌に関する一研究—中国地域を中心に」小林茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会, 256-304.
- 渡辺正氏所蔵資料編集委員会編 2005. 『終戦前後の参謀本部と陸地測量部—渡辺正氏所蔵資料集』大阪大学文学研究科人文地理学教室.

